

第14号

発行日 平成5年11月12日

発行所

東京青山同窓会事務局

〒153

目黒区東山1-3-1-401

TEL 03-3716-3667

発行者 阿尻 威吾

東京会報

東京青山同窓会

東京青山同窓会年間維持費

1口1,000円2口以上(年間)

会計幹事 小林元雄(61回)

振込先

安田信託銀行 虎ノ門支店

普4046552 東京青山同窓会

郵便振込口座 東京9-710451

平成5年度新人歓迎会開催



平成5年5月14日、東洋経済新報社ホールにて東京青山同窓会新人(101回卒)歓迎会が盛大に催された。新人110名、諸先輩50名余りの参加をいただき新旧入り乱れ和気あいあいのうちに進行した。つい数ヶ月前までのクラスメートに再会した新人たちの顔は輝きにあふれ、大先輩たちの顔ぶれにも臆することなく楽しんでいる様子は頼もしい限りであった。女子学生の姿が目立ち、時代を象徴する眺めとなった。歓迎会は44回斎藤伸雄会長の親しみあふれる挨拶から始まり、多忙を押して出席いただいた36回斎藤英四郎名誉会長から「東京という新天地のもと古い衣を捨て、勉学に恋にと青春を謳歌し伸び伸びと生活して下さい。そして新潟出身を誇りに思い社会に貢献できる人間を目指していただきたい。」と激励の言葉をいただいた。

続いて、52回豊岡先輩の挨拶、さらに、新人達の担任であった田村先生、山下先生より新潟からのメッセージを交えながらの心暖まるお話しがあり、新人達も一瞬タイムスリップした様子で眼が輝いた。一部の締めくくりは、56回三崎氏の玲瓏の天、新人本間君の百里流れてで合唱となった。二部は40回高田氏の乾杯で幕を

開け、新人達の旺盛な食欲と、新旧交えての合唱で盛大のうちに閉会した。新しいスタートをした新人達には、この同窓会に親しみかつ大いに活用してもらいたいと願う次第である。



斎藤英四郎名誉会長(36回) 斎藤伸雄会長(44回)

人生至る所に青山あり

52回豊岡富栄

“紀元は2600百年”と全国民が歓喜に酔っていた昭和15年、私は青山の校門をくぐった。“大東亜共栄圏”確立をめざしてわが国が大陸侵攻を進める最中であったが、翌年には無謀な太平洋戦争に突入していた。鉄鋼や軍用機の生産力において彼我の間には五対一の大差があり負けるべくして敗戦の日を迎えた。私は海軍兵学校の二号生徒(二年生)であった。

しかし廃虚の中から立ち上がったわが国の経済力は今や米国を凌ぎ、鉄鋼、造船、自動車等の重厚長大産業で世界を圧倒している。産業の飯といわれる半導体など半分のシェアを占めるほどだ。日本の軍備を恐れた占領軍は、資金力の集中を排除すべく財閥の解体、農地解放を強行した。無条理ともいべき強制命令であったが、これらの措置によって、日本は地球上稀にみる社会格差のない単一民族国家に生まれ変わった。“天は人の上に人をつくらず”法の前に万人が平等であるという人権思想が日本ほど行きわたった国はない。誰にでも大学進学が可能であり、全ての者に夢を追うチャンスが与えられることが、わが国を経済大国に仕立て上げた。戦後の混乱から世界最高最大の産業国家に至るプロセスを経済記者として逐一見据えてきたことはそれなりに意味があったと思う。不景気といっても巨大ビルの林立は止まらない。不況が長引けば公共投資の拡充によってファンダメンタルズはますます充実する。久しぶりに生まれ故郷にたち帰ると、道路網の充実ぶりには目を見張るものがある。いわきバイパスの開通で太平洋と日本海が三時間足らずで結ばれる日も近い。新幹線や関越道路など合わせ考えると、まさしく高機能国家そのものである。近ごろ、“日本海経済圏”なる言葉が聞かれるようになった。中国、朝鮮、ロシアという海のかなたにある諸国との交流が急展開するのは国際情勢から見て必至である。東京で学業を修める諸君には、人生至るところに青山が待ち受けている。

青山同窓会に出席して

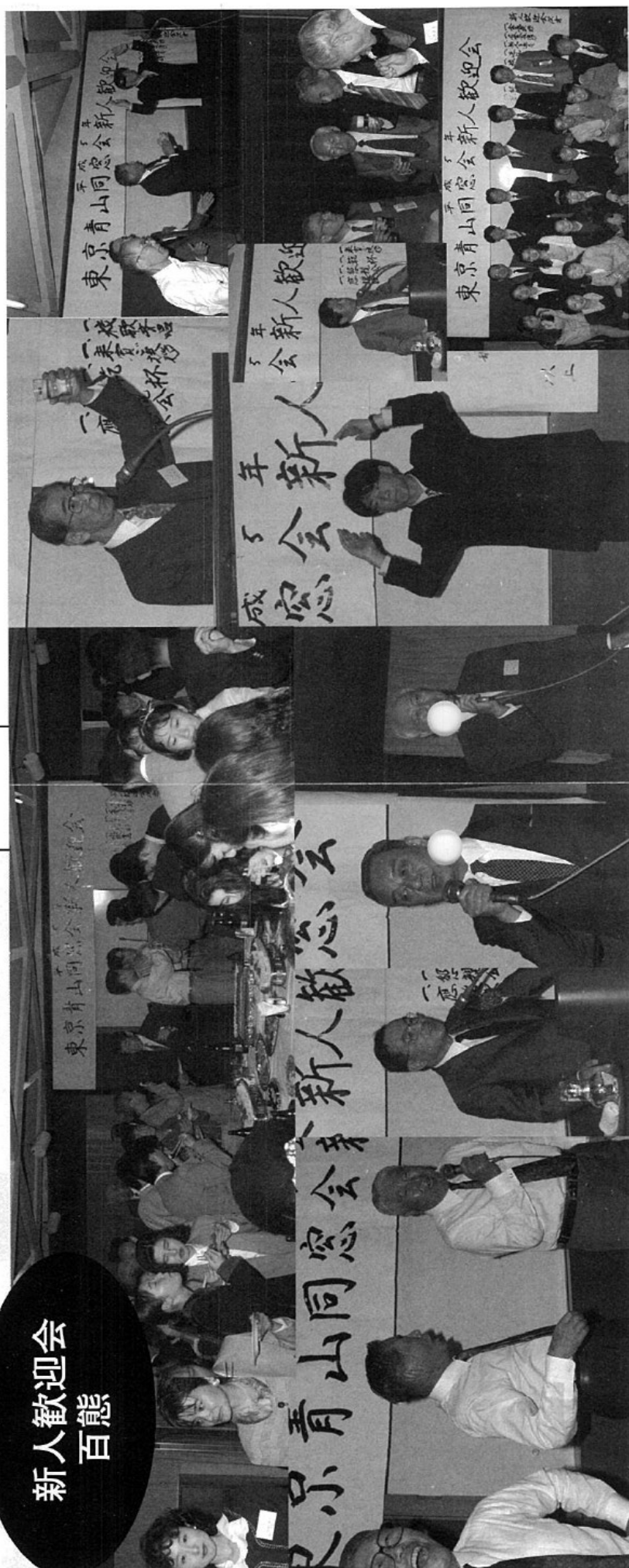
55回

阿尻 威吾



7月16日、斎藤伸雄会長に随行して、佐藤副幹事長と、新潟の総会に参加した。流石、地元とあって、会場のホテル新潟大宴会場を埋めつくす盛況さである。総選挙を目前の18日に控えて、100名ほど出席予定者が減ったというが、それでも900名近かったのではないかな。今年は懇親会の前に久しぶりに「玲瓏の天」と「百里流れて」の斉唱が行われ、歌声が会場に響き渡った。やはり校歌の斉唱はいい。歌いながら、感動して声もはずんでくる。予め配布された歌詞は、「玲瓏の天」の四番の「裏日本に名を挙げて」が「裏日本の覇者として」に、五番の「真白き砂の丘の上」が「白砂塵なき丘の上」に訂正されてあった。私共は、訂正前の歌詞で覚えていたので、それが正しいものと思い込んでいたが、いろいろな歴史と経緯があり、「本来の正しい歌詞に」と熱心な主張が多かったからであろうか。ご出席の会員の中には、ご年輩で、お元気な方が多かったが、出席の最長老は28回の松浦茂路氏で、氏が乾杯の音頭をとられた。28回というと、91歳か92歳の筈であるが、お見受けしたところ、とてもそんなお年には見えない。しかも、言語は明瞭、かくしゃくとしたものであった。懇親会では、卒業後初めての友人に出会ったり、ついこの間まで東京で活躍して頑張っていた渡辺君（72回）、清水君（87回）らの元気な姿にも接し、新潟弁を周りに聞きながら、テーブルをあちこちと渡り歩いた懐かしい出会いの一晩であった。

新人歓迎会
百態



なかなか一致しない 期待と現実



101回佐野健太

上京してきて半年が過ぎました。それぞれ大学の前期試験も終わり、東京での生活にも余裕ができたことで、新たな目標に向けて頑張っています。この半年をふりかえると、親元を離れて初めて分かるというか、食事、洗濯等の日常生活のことから、アルバイトで実際お金を稼ぐことまで、親のありがたみというものをひしひしと感じる日々であったと思います。学生の本分「勉学」のことにについてふりかえると、これといってまだ手応えを感じていないのが正直なところです。上京前には、ある種「勉学」というものへの意気込みを持っていました。東京に行けば、芸術、文学などのいわゆる「本物」と呼ばれるものに容易に触れることができるかと期待して上京してきました。しかしいざ半年を振り返って見ると、なかなか期待と現実は一貫してきていないようです。いままでは「できない」と非常に消極的なことを言っていました、半年たち、時間にも余裕ができた今、考えてみると、これは「しようとしていない」という言葉の間違いであることに気付かされました。時間に余裕が出てきたと前述しましたが、これも時間がなかったということではなく、時間を作らなかった、作ろうとしなかったということだったと思います。新潟弁でいわく、のめしをこいていた半年だったと思います。「少

東京青山同窓会 101回生幹事名簿

学年幹事	佐野 健太 (7組)	〒279	千葉県浦安市猫実2-16-1 グリーンハイ201 自0473-50-1291
学年幹事	山口 映美子 (2組)	〒236	横浜市金沢区柳町1-4横浜市大女子寮 呼045-783-1322 (～夜10時)
【クラス幹事】			
1組	高野 明	〒223	横浜市港北区日吉本町4-16-35 ふじ荘103号
2組	石川 靖秀	〒167	東京都杉並区下井草2-19-8 7ハウス101号
3組	若山 裕伸	〒189	東京都東村山市秋津町2-141シティハイム秋津A棟203号 0423-97-8944
4組	佐藤 明範	〒112	東京都文京区春日2-20-14楠本義雄方 03-5802-5173
5組	佐藤 素之	〒243	神奈川県厚木市愛甲730番地7アパートメント東朋204号
6組	大谷 里佳子	〒180	武蔵野市吉祥寺本町4-26-2吉祥寺女子学生会館302 0422-55-9808
7組	佐野 健太	〒279	千葉県浦安市猫実2-16-1グリーンハイ201
8組	阿部 憲幸	〒168	東京都杉並区久我山4-40-12セビィ久我山パートⅡ105号
9組	佐久間 淳	〒152	東京都目黒区大岡山2-3-23ヒール大岡山206 03-5701-0965
10組	渡辺 啓嗣	〒274	千葉県船橋市前原西8-27-31九州学生会館 0474-69-7997 #212
11組	村川 純	〒146	東京都大田区南久が原2-32-4玉風荘101 03-5482-3207
12組	笠原 久美子	〒173	東京都板橋区仲町2-1お茶の水大山寮

年老易く、学成難し。」という言葉がありますが、一生において真剣になって学べる時というのは限られています。そして今こそがその学ぶ時だと思えます。半年後、一年後、また反省文を書く機会があるときには自信を持って充実していたと書けるように、頑張っていきたいと思う今日この頃です。

上京後、半年をむかえて

101回山口映美子

横浜での新生活が始まって半年。私にとってこの半年間は、忘れることのできない時間になりそうな気がします。なぜなら、大学生活に対する私の考えを変えてくれた新しい出会いに恵まれたと思うからです。今思えば、最初の1ヶ月は毎日が緊張と不安の連続でした。周りは知らない人ばかりで、慣れない寮生活にとまどっていたのを覚えています。恥ずかしい話ですが、新潟や家族や友人が恋しくて泣いたこともありまし

た。そんな時、私の心の支えになってくれたのは、やはり“青山の友情”でした。幸せなことに、私は高校時代、多くの素晴らしい友達に恵まれ、楽しく充実した高校生活を送ることができ、そのお陰だと思っています。こちらの生活に慣れて、サークル活動(バレーボール)にも積極的に参加するようになって、人間関係の幅がぐっと広がりました。高校ではほとんど接する機会のなかった3つも4つも上の先輩といろいろな話をできたことは、とてもプラスになりました。今後もサークルに行きバレーボールをしたり話をしたり、お酒を飲んだり(?)することを通して、楽しい中にも何かを学んでいきたい、と思っています。そして、今私は平凡で楽しいだけの大学生活を送るのはもったいないという考えから、資格取得に挑戦してみようと検討中です。これも先輩の影響ですが、大学の勉強のほかに自分をレベルアップさせるものをみつけることができ、それに向かって頑張ろうという気持ちでいっぱいです。これからも、新

潟を離れたからこそできる経験を積み重ね、有意義な大学生活を送りたいと思います。また、“青山の友情”も大切に、時々成長した仲間

にあって、高校時代の思い出を語れたら、と思っています。東京青山同窓会の先輩方、今後も私達にご指導のほど、よろしくお願い致します。

教育者としての五十嵐一

74回小澤喬

あの不幸な事件で五十嵐さんが突然他界してからもう3周忌になる。私と五十嵐さんとは新潟高校の同期であり、入学して間もなく、たまたま同じクラスとなったことが縁で友達になった。それ以降は公私に互って随分と長い間五十嵐さんにお世話になった。1年8組は当時茸の権威として知られた松田先生（生物担当）が受け持ち、和気藹々とした雰囲気の良いクラスだったと思う。五十嵐さんは入学当初から成績抜群の学生としてクラスの中で異彩を放っていた。しかし五十嵐さんは狭い意味のいわゆる学校秀才ではなかったと思う。当時からも、高校の勉強の限界を見極めてものを言っているようなところがあった。たとえば、五十嵐さんは学校で学習する授業科目のあらゆるものについて、本来勉強というものはもっと面白いものであるはずなのに面白くなくなっている、という意味のことを度々述べていたのが印象に残っている。高校での学

習内容に人為的な枠がはめられていることに不満を漏らしたものだっと思う。私はまた五十嵐さんが高校時代に自分は学者であるより評論家でありたいと言っていたのを思い出す。その言葉通り五十嵐さんは非常に批判精神が旺盛で贗物や虚偽に対して敏感に反応した人だったと思う。つまり本当に良いものとそうでないものを選び分けることが大切だと思っていたに相違ない。五十嵐さんがあらゆる贗物の権威に挑戦しそれを否定してしまおうとするようなところがあったのも頷ける。二年の頃だったか五十嵐さんが中心となって「英語研究会」という同好会が発足した。課外活動として自由に英語を学びたいと思っていた私は喜んで入会した。受験の為の英語ではない本来の英語に直接触れ、様々な文献の読み方を五十嵐さんから教えていただいたことが今日の私にとっては何物にも代え難い経験だったと思う。

母校が改築、移転？ 老朽化が進む校舎。 OBが県に陳情。

[新潟日報9/19記事より抜粋]

現在の校舎は昭和31年に完成したもので、最近壁がはげる、雨漏りがするなど老朽化が目立ち県教委による校舎の耐力度調査が実施された。改築は余儀ないところだが、現在の用地は4.1hと狭いため、現在地での改築となると、県内では初めての高層校舎になる可能性がある。もっと広々とした環境をという声もあり郊外への移転も考えられるが、「青山」を離れることには抵抗感もあり今後議論を呼ぶのは必至。

さて東京青山同窓会の諸氏はどうお考えだろうか？

編集寸筆

先輩方の中には、太平洋戦争という歴史の大波を経験された方もいらっしゃると思いますが、最近自然環境も含めて世の中が大きく変化していくような気がしています。100年を超える我が校の歴史は、これからどのようにして紡がれて行くのでしょうか。歴史の中の時間がタテ糸だとすれば、ヨコ糸は人間関係。この同窓会が、個人にとっても社会にとっても素敵な未来を創る為の出会いの場となれたら幸いです。

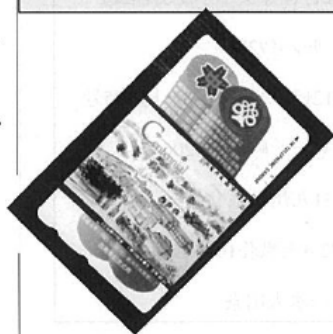
「青山夢像館」60回誌刊行！

18人の先生方と、新潟市長からも原稿をいただき、創立100周年記念60回生同報誌「青山夢像館」A5判・上製本・938頁が刊行され9月18日、渡部秀英、大橋信夫、松浪清、大橋禎助、小黒栄作 各先生方のご出席もあり、同級58名が越後湯沢ニューオータニホテルにて出版記念会が行われた。同期編集人、佐々木城氏の二年半に渡る努力と、オリオン印刷（株）（石田瑞穂社長67回卒）の熱心な協力を得た結果です。この時代、昭和21～26年頃の表はもちろん暗闇まで負になってしまいました。戦后、文部省の力が幼い頃のノビノビと暴れ廻った青山生の記録誌です。

60回金山常吉



事務局日より



記念テレカ創立100周年記念テレカ

・創立100周年記念テレフォンカードコンクール入選作品ご希望の方は新潟青山同窓会へ事務局では会員の近況や故郷の情報などを紹介して行きたいと思っています。今回も、会員の方から「校舎改築か移転か」という新潟日報の記事を送っていただきました。少ない紙面ですが、どうぞ情報交換にお役立て下さい。（連絡は事務局まで Tel.03-3716-3667）